広報たかやま（2019 年 3 月 15 日発行）

飛騨山脈ジオパーク構想 ジオサイト（第15章）

上宝町の石仏（上宝町荒原）

国府町から県道76号線で上宝町に向かい、大坂峠（通称十三墓峠）を越え2キロ程下ったところに濃飛バスの「石仏前」バス停がある。

バス停の奥に、カラ松の間から高さ12メートル程のまるで仏様のような形をした岩肌が突出している。これが地名の由来の「石仏岩」で、足元には小さな祠が建てられ祀られている。周囲にも点々と岩肌が露出し、屏風岩、駒掛岩、鏡岩、箪笥岩などと名付けられ、全体が「石仏と奇岩群」として高山市の天然記念物に指定されている。「石仏と奇岩群」は、どのようにしてつくられたのであろうか？

今から６６００万年前～６０００万年前の中生代白亜紀最末期から新生代古第三紀にわたり、現在の大雨見山（国府、丹生川、上宝町にまたがる山）を中心に、約１００平方キロにわたって流紋岩質マグマによる火山活動が起こった。このときできた溶岩や凝灰岩、火砕流堆積物を主体とする地層をまとめて「大雨見山層群」という。「石仏と奇岩群」の岩石の本体は、大雨見山層群の流紋岩溶岩である。この溶岩は、中に青灰色の玉ズイ（石英の微小な結晶の集まり）を含んでいて、「球顆流紋岩」という。溶岩の一部は大坂峠近くにも露出し、風化した部分から数cm～こぶし大程の玉ズイの塊を見つけることができる。

石仏岩は、６０００万年という長い年月をかけ、風化や侵食を受けた球顆流紋岩が、偶然にも仏様の容姿になって現れたものである。

（飛騨地学研究会　寺門　隆治）

問合　飛騨山脈ジオパーク推進協議会
☎0578-84-0038